能登の風 人情受け

7歳から79歳 123キロ完走

快晴の秋の能登路を1219台の銀輪が疾走した。「第21回ツール・ド・のと400能登半島一周サバイバル・サイクル2009」初日の20日。出場者は海沿いの絶景や潮風を全身で味わい、沿道から送られる温かい声援に能登の人情を感じ、ペダルをこぐ足に力が入った。【1面に本記】

出発を見送る台湾側の関係者 ＝内灘町の石川県立自転車競技場

台湾の関係者視察「魅力的なツアーに」

台湾サイクリング協会と台湾トライアスロン協会の関係者5人が開会式と一部コースを視察し、来年以降、台湾人を対象とする参加ツアーの企画に意欲を示した。

県の招きで石川入りした5人は運営や施設について説明を受け、風光明媚なコースと住民のもてなしが全国の愛好者の人気を集めていることを知った。

台湾サイクリング協会の何麗卿秘書長は「的確な大会運営と参加者のマナーの良さが印象に残った。観光と組み合わせれば魅力的なツアーになる」と話した。一行は23日まで滞在する。

123.6キロを走破し、満面に笑みを浮かべる山田君 ＝輪島市マリンタウン

今大会の最年少7歳の山田いづる君＝金沢市高尾町＝は一日コース（123・6キロ）に出場し、父貴弘さん(36)と制限時間30分前の午後6時ごろゴールした。山田君は「山道は苦しくて泣いてしまったけれど楽しかった。また走りたい」と達成感をにじませた。

07年の骨折を乗り越え、2年連続のチャンピオンコース完走を目指す最年長の松島忠弘さん(79)＝奈良市＝は「とにかく楽しんで走り抜きたい」と意欲を燃やした。

輪島市門前町総持寺通りでは、住民が銀輪を出迎えた。2007年3月の能登半島地震から2年半。よみがえった町並みに出場者は確かな復興を感じ取った。終盤の100キロ地点過ぎにある円山峠（同市）では歯を食いしばって登り、午後3時半ごろから次々と初日ゴールの輪島市マリンタウンにたどり着き、笑顔で互いの健脚をたたえた。

能登半島地震から復興した通りを走り抜ける出場者 ＝輪島市門前町総持寺通り

伴走は元プロ 三船雅彦さん

元プロロードレーサーの三船雅彦さん(40)は、伴走者として出場者を激励し、長距離走行の心構えや走法を助言した。全行程に同行する三船さんは「出場者とともに楽しみたい」と笑顔を見せた。

このほか、プロチーム「NIPPO・コルナゴ」（東京）の大門宏監督＝金沢市出身＝と同チーム所属の廣瀬敏選手＝同＝ら6人も出場者に付き添い、サポートした。